

婺源におけるキノドガビチョウ (*Garrulax galbanus courtoisi*)

何芬奇¹・奚志農²

1 中国科学院動物研究所

2 野生中国作業室

訳 福井和二

1919年、フランスの植物学者F. Courtois 神父は我が国の江西省婺源^{ウユアン}県(当時安徽省)において2体のキノドガビチョウの標本を採取し、1923年、フランス鳥類学会会長M. A. Menegauxはこの2体の標本に性別不明のままガビチョウ属の新種として*Garrulax courtoisi*と命名した。1930年、Berliozはガビチョウ属の系統分類を検討中、英国人Godwin-Austenがアッサム地方のプラマトラ河溪谷(Munipur Valley)における標本と合わせてキノドガビチョウ*Garrulax galbanus*と命名し、後者を一亜種として*Garrulax galbanus courtoisi*とした。この二種の発見地は2000km以上も離れている。その後、1982年、我が国の鳥類学者鄭作新と唐瑞昌が1956年、雲南省思茅^{シマオ}の石頭山で採取した標本に*Garrulax galbanus simaoensis*と命名した。ここにおいてキノドガビチョウ(*Garrulax galbanus*)に3亜種あることが確認され、そのうち基亜種はアッサム地方東北部のナガ山脈(Naga Hills)東からビルマ西北部の欽嶺(Chin Hills)から南に阿拉干山(Arakan Mountains)のバングラデシュに至る地域で見られ、亜種*courtoisi*と亜種*simaoensis*は反対に標本採集後もかつて報告されたことがなく、この3つの亜種は異った地域に分布していることを表している。

婺源のキノドガビチョウの特徴；体長約240mm、頭頂は深い藍色、前額に一筋の銀色に輝く細い横帯がある。側面と腮は黒、背部と雨覆は淡い黒褐色、尾羽は灰褐色、先端中央が広く黒褐色でその両側が白色、下尾筒は白色。繁殖期の典型として胸から腹にかけ、艶やかな黄色を呈し、繁殖後期には灰黄色に変わるが、喉の部分にわずかに濃い黄色が残る。

婺源県域内においてキノドガビチョウの搜索を1994年に開始して、7年を経過し、婺源県林業局の洪元華、鄭磐基両氏により2000年5月までに2つの繁殖群、合計約80~90個体を発見した。その後2001年、そのほかに2つの繁殖群を発見し、その個体数約150~160羽を確認した。2002年にはその繁殖群の一つが河を挟んで2つの繁殖群に分化する態勢であることがわかった。

2000~2002年にかけて行なった野外観察により、婺源のキノドガビチョウが集中的に繁殖する地域は海拔100m以下で、多くのガビチョウ類と異り、群れをつくって繁殖し、稀には針葉樹を利用するものもあるが、多くは樹高の高い広葉樹の樹冠部で営巣し、一定の場所にねぐらを取り、巣立ち雛は、飛翔力がつくと、全ての個体が繁殖地を離れていく。非繁殖期の彼らの生息場所がどこなのか、調査が待たれる。

キノドガビチョウの婺源個体群は現在知られている我が国の最も稀有な特産鳥類である。もし、レッドリスト基準で評価するならば、キノドガビチョウの婺源個体群は明らかに危急等級ENに該当し、“1分類種が占有する面積が500km²より少なく、且つその分布地は分割され”さらに“成熟個体数が250より少ない”等の条件に合致し、どの面から見ても絶滅危惧の状態にあるといえる。キノドガビチョウの婺源個体群に対する繁殖生物学と生態学の野外研究はまさに緒に就いたばかりである。